

2013 年度台北事務所主催日本語教育研修会（報告）

横山紀子（国際交流基金）

(1) 研究会のテーマ：聴解を習得につなげる教室活動

(2) 内容の概要：

まず、聴解が言語習得に果たす役割を確認するために、第二言語習得研究の代表的な理論である「インプット仮説」「アウトプット仮説」を紹介した。「インプット仮説」は、大量のインプットを聞いて理解することが言語習得の最大の源泉であると主張したが、ここからは、文脈や背景知識を活用し予測や推測を行いながら理解を進めることが重要であることが指摘できる。「アウトプット仮説」は、学習者がアウトプットをすることには、「何が言えないか」という自らの言語能力の不足に気づく機能があるとするが、聴解においては、アウトプットで気づいた不足を補うインプットを与えることが重要であると指摘できる。

次に、日常生活における聴解を振り返り、次の3点を指摘した。(1)対面聴解が多い。(2)「話す」「読む」「書く」など他の技能を一緒に使うことが多い。(3)知らないことばや聞きとれないことばがある。聴解の指導には、これらの特徴を反映させると同時に、日常生活における実際の聴解において必要となる聴解ストラテジー（予測する・推測する・質問する等）を導入することが重要である。

続いて、予測のストラテジー、推測のストラテジーを導入した聴解の教室活動を体験してもらいながら紹介した。さらには、そうした教室活動がどのような効果を生むのか、教育実践の効果を検証する研究の例を紹介した。研究例は、いずれも、日本以外の国で非母語話者教師によって行われたものである。（参考文献の1～3を参照）

さらに、聞いて理解するに止まらず、聴解を習得につなげるためには、「アウトプット仮説」が指摘するように、アウトプットを経て不足に気づいた言語形式に注目することを狙った活動を行うことが重要である。具体的には、テキストの理解確認が済んだ後の活動として、(1)スクリプトの空白埋め、(2)ロールプレイ、(3)再話、(4)シャドーイングを紹介した。

最後に、国際交流基金が JF 日本語教育スタンダードに準拠して開発したコースブック『まるごと 日本のことばと文化』（入門 A1）を紹介した。このコースブックでは、本研究会で紹介した聴解を習得につなげるプロセス（①文脈・場面を活用し予測・推測をして聞く→②意味を理解してから言語形式に気づく←→③話す）を設計に取り入れている。

参考文献

1. 王路(2008)『『モニター』ストラテジー指導を初級聴解授業に取り入れる試みー質問の活動を通してー』『日本語文化研究会論集』第4号

<http://www3.grips.ac.jp/~jlc/jlc/ronshu2008.html>

2. ショリナ, ダリヤグル(2008)「ピア学習による仮説検証型聴解授業の試みーカザフ民族大学を例にー」『日本語文化研究会論集』第4号
<http://www3.grips.ac.jp/~jlc/jlc/ronshu2008.html>
3. 杜艶(2009)「聴解授業における推測ストラテジー指導の試みー『声のクローズ』の活動を通してー」『日本語文化研究会論集』第5号
<http://www3.grips.ac.jp/~jlc/jlc/ronshu2009.html>
4. 横山紀子(2008)国際交流基金日本語教授法シリーズ5『聞くことを教える』ひつじ書房
5. 横山紀子・福永由佳・森篤嗣・王璐・ショリナ, ダリヤグル(2009)「ピア・リスニングの試み：海外の日本語教育における課題解決の視点から」『日本語教育』第141号 日本語教育学会 pp.79-89